



児島で発掘、8ミリの求人映画



工場内の様子

児島の商店街での買い物風景

先月号でお知らせした、児島での就職をPRする求人用の8ミリフィルム「希望の児島」を、ライブラリーセンターでデジタル起こしました。このフィルムは、児島の繊維会社「ショーワ」の会長片山雄之助さんからデジタル化の依頼があったもので、当時の定時制市立児島第一高校の校舎が増築中であることから、制作されたのは、1963年、昭和38年頃と思われます。

前の35ミリシネマに比べるとピントが悪く経年劣化も進んでいましたが、カラーで撮影されている上、撮影者の欄に「RSK 児島八ミリ」と記載がありました。列挙された名前に見覚えはありませんが、山陽放送が1958年、

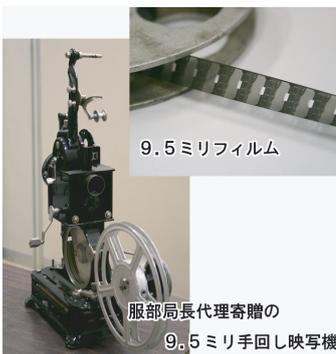
昭和33年にテレビ開局した当時、ローカル映像を補う為、各地区にアマチュアの8ミリフィルムクラブを組織していたと言う事です。この映画を撮影したのもそのグループの一つかもしれません。

内容は、丸亀などからやってきた中学卒業直後の女性たちが、児島の繊維会社で働きながら勉強し、立派な社会人になっていくというものです。映像の中には、買い物客で賑わう児島の商店街や統合された児島第一高校のクラブ活動の様子などが紹介されており、今となっては珍しい映像の一つです。

添付されていた6ミリのオーディオテープには映画の場面と必ずしも一致しない音声が入っていましたが、何とか使えそうなので、編集後、片山会長にDVDとしてお渡しするとともにセンターで保存することになっています。現在撮影者と連絡を取って映像利用が可能になるよう作業中です。

記録メディアの歴史

①「9.5ミリフィルム」



9.5ミリフィルム

服部局長代理寄贈の
9.5ミリ手回し映写機

9.5ミリ映画の歴史は今から90年近く前に遡ります。当時映画と言えばフィルム幅35ミリの劇場用だけでした。しかし機材もフィルムも非常に高価で一般の人の手には入りません。

そんな中、1920年にフランスの映画機材メーカーPathé社から売り出されたフィルム幅9.5ミリの「パテベビー」は、フィルムの真ん中に送り用の穴を開ける事でフィルム幅一杯に画像領域を取る事ができ、小型ながら質の良い撮影が可能でした。このため、自分で映画を撮影したいと言

うアマチュアの圧倒的な支持を受けて欧米や日本に急速に普及しました。

安くなったとはいえ、カメラと映写機を合わせると小さな家が一軒建つほど高価で、1本のフィルムの代金と現像代で米が一俵買えるほどのランニングコストでしたが、岡山倉敷、津山などの名家御用達となり、大正末期から昭和初めに至る各地の貴重な風物が撮影されました。その映像の多くはセンターの財産になっています。

写真は、センターで活躍している総務局服部品志局長代理寄贈の手回し式映写機と、真ん中に送り穴のある9.5ミリフィルムです。

ジャケット制作します

以前から時折要請のあったDVD・CDのジャケットとディスク表面の印刷を、ライブラリーセンターとして実費で引き受ける事にしました。もちろんVHSのシールもOKです。

テレビ、ラジオの作品を社外に出す時にご利用下さい。

